

一、喉頭護謨腫ノ好發部位ハ左側喉頭部次デ會厭ナリ。

一、喉頭微毒ハ三期中第三期症ヲ最モ多シトス。

驅微療法ニ於ケル六〇六號製劑並ニ水銀劑ノ選定ニ就テ

杉 下 尙 一

驅微療法ハ古來ヨリ水銀劑ノ卓効アルコト並ニ砒素劑ノ偉効アルコトヲ實驗的ニ知ラレ其ノ病原菌ハ漸ク明治三十八年シヤウチン氏ニヨリ「スビロヘーテ・バルリーダ」ナルコトヲ認メラレタリ、更ニエールリッヒ氏泰氏ニヨリ六〇六號「サルバルサン」ノ創製トナリ、之ガ社會ニ提供セラル、ヤ世ハ其ノ効力ノ偉大ナルニ驚歎ヲ以テ迎ヘタリ、然レドモ之ヲ實際的ニ使用スルニツレ漸ク其ノ缺點ヲ發見セラレ更ニ使用方法等ヲ改良セラレ即チ「ネオサルバルサン」ノ發賣トナリ、之ガ靜脈注射トナリテヨリ非常ニ治療上其ノ缺點ヲ除カレタリ、歐洲戰亂以後我國ニテモ六〇六號製劑ノ製作セラレシヨリ色々ノ製品ノ吾人ニ提供セラル、ニ至リ、又即チ余ハ左ニ六〇六號製劑並ニ水銀劑ノ選定ニツキ余ノ實驗ヲ述べ各醫諸君ノ御參考ニ資セントス。

(一)、六〇六號製劑ノ選定。吾人ハ目下微毒ノ治療ニ當リ先ヅ患者ノ微毒ナル診斷ヲ得バ其ノ病期ノ第何期タルヲ問ハズ、第一ニ六〇六號製劑ニテ之ガ治療ヲ試ミ其レニ水銀劑ノ並用シ行クヲ定則トセリ、而シテ普通「サルバルサン」並ニ其ノ類ヲ苛性ナトロン液ニテ處置シ溶解シ稀薄液トシテ注入スルヲ最モヨシトセリ、然レドモ其ノ副作用トシテ發熱シ時ニハ四十度ニモ至リ其等ノ副作用ハ大抵之ガ溶解ニ使用スル蒸餾水ノ缺點ニ歸シ此ノ改良トシテハ新シク製セラレタル蒸餾水ヲ使用セラレタリ、然レドモ之ガ注射後ハ大抵發熱ヲ免カレズ且ツ「サルバルサン」劑ハ實地吾人ガ如キ開業醫師ニトツテハ「ネオサルバルサン」製劑ノ發賣ト共ニ之ヲ顧ルモノ殆ドナキガ如シ。

「ネオサルバルサン」ノ使用ニヨリ而モ全量二十瓦容量ノ濃厚溶液ヲ以テ靜脈注入セラレテ以來大ニ治療上ニ簡ナル

ヲ得タリ、サレド吾人ハ尙發熱等ノ副作用ヲ存シテ注射後ハ絶對ニ安靜入院治療トセラレ其ノ不便甚ダシカリキ。

余ハ最近其ノ使用ノ蒸餾水ガ二〇瓦入リノ「アムプレ」トシテ市場ニ出デシ以來殆ド之ヲ使用シテ來リ新鮮蒸餾水ト大差ナキヲ知レリ、然シ「ネオサルバルサン」並ニ「ネオアルサミノール」ヲ使用ノ際時々其ノ副作用ノ爲メ即チ患者ヲ運動セシムルニ(通院)大抵發熱ヲ伴ヒ時ニハ發熱セザルコトモアレドモ外來通院ニハ不適當ナリ、然レドモ「ネオネオアセーミン」ヲ使用ニ當リ約七十回ニ涉リ其ノ發熱ノ場合ハ非常ニ少數トナレリ、中ニハ注射後十五六分ニシテ約一里ノ道ヲ歩行セシメ又ハ約三十哩モ汽車ニテ歸宅セシムルモ敢テ副作用ヲ認メズ、即チ之ガ治療ニ對シ非常ニ患者ノ便ヲ與フルニ至レリ、勿論患者ニハ着宅後ハ比較的ニ安靜ヲ命ズルト雖モ絶對的ニ命セズ、其後患者ノ報告ニヨリ別ニ副作用ヲ認メズト。

余ハ嘗テ某醫師ノ話ニヨリ「ネオネオアセーミン」ニヨリ非常ニ副作用ノアリシ一例ヲ告ゲラレシモ余ノ實驗ニハサルコトナシ尙用量モ之ニ或ハ關スルナランカ。

余ハ先ヅ最初ニ〇・三ヲ使用シ第七日若クハ第八日ニ〇・四五ヲ使用シ更ニ七日ニシテ〇・六ヲ使用シ其後水銀劑ヲ使用シ更ニ〇・三又ハ〇・四五ヨリ再三回反復シテ再ビ水銀劑ニ移リワッセルマン氏ノ反應ヲ試驗ス。

然レドモ「ネオネオアセーミン」ト雖モ少シク運動シ過グレバ又發熱ヲ見「ネオアルサミノール」ト雖モ安靜ヲ嚴開セバ發熱ヲ見ズ、只比較的「ネオネオアセーミン」ノ方少ナキガ如シ。

(二)、水銀劑ノ選定。

水銀劑ノ卓効アルコトハ古來ヨリ知ラレ初期硬結ニ對シ甘示ヲ使用シ甘示昇示等ヲ内用セリ、其後「サリチール酸、水銀流動バラフィン」ノ注射ヲ創メラレタルモ注射ニ對シ可ナリ疼痛強ク往々ニシテ患者ハ中途ニシテ之ヲ廢ス、然ルニ「ルエスチン」ヲ以テスレバ比較的疼痛少ナク之ヲバ婦人ニ對シ小兒ニ對シ使用ニ便ナリ尙近ク「イマミコール」ヲ以テ靜脈ニ注射スルニ少シモ疼痛ナク副作用ナク非常ニ都合宜シク左ニ余ハ之ガ使用例ヲ舉ゲントス。

1、ネオネオアセーミン注射〇三	四日ニシテ	2、イマミコール	一cc	四日ニシテ
3、ネオネオアセーミン注射〇四五	四日ニシテ	4、イマミコール	一cc	四日ニシテ
5、ネオネオアセーミン注射〇六	四日ニシテ	6、イマミコール	二cc	六日ニシテ
7、イマミコール	二cc	8、イマミコール	三cc	
9、イマミコール	三cc	10、イマミコール	四cc	
11、イマミコール	四cc	12、イマミコール	五cc	
13、イマミコール	五cc	14、イマミコール	四cc	
15、イマミコール	四cc			

時ニハ四ccニテ

更ニ砒素劑ノ使用ニテ反復ス。

斯ノ如クニシテ結果宜キガ如シ、然レドモ充分ノ例ヲ有セザル故ニ諸君ノ御參考ニ迄供セントス。

黴毒ニヨル眼疾患ノ統計的觀察

櫻井與藏

演者ハ金澤醫科大學附屬醫院眼科部外來新患者一〇二八五人中臨床的ニ黴毒性ト思ハル、症狀ヲ有シワッセルマン氏反應強陽性、陽性、弱陽性ノ何レカナル患者一六一人ニ就キ稍々詳細ニ亘リテ統計的觀察ヲナシ次ノ如ク總括セリ。

(一)、附屬醫院眼科部ニ於ケル最近外來新患者一〇二八五人ニ對シ黴毒性症狀ヲ有シワッセルマン氏反應強陽性ナル眼疾患患者ハ一六一人ニシテ、之ガ百分率ハ一・五六%ナリ。

(二)、黴毒性眼疾患ヲ各系統別ニスレバ角膜系ニ於テ最も多キ罹患率(二六・〇八%)ヲ示シ、次イデ網膜系(二三・六%)、葡萄膜系(二二・一%)、視神經系(九九・三%)ノ順ニシテ丸尾氏統計成績ニ比シ殆ド相同ジナレドモアレキサンダー氏ノ